

四級へ 河西葦平、石井央雄、清水邦雄、古川興孝、谷岡謙

○十一月講道館紅白勝負の結果初段に列したる者

塚本太作、山中駿吉、中野榮三郎

尙初段より二段へ、二段より三段へ昇進したる者ある由であつたが、當日は發表されなかつた。

一〇 明治三十九年史

(一) 内田師範の渡韓

明治三十七年以來師範として熱心に部員を指導せられたる内田師範は、今回朝鮮統監府に赴任することとなりたるを以つて、二月七日午後二時より餞別勝負を行ひ、夕刻より送別茶話會を催した。

餞別勝負としては、有級者有段者の三本勝負二十五組を行ひたる後、内田師範出でて、自ら同夫人を對手にその考案にかかる勝負之形を演ぜられたるは、日新しきものであつた。次に五人掛二組十人掛一組あり、吉武二段對一級近藤、中田、初段塚本、中野、大塚の五人掛は中野と引分、福田二段對有級者十人掛けは七人目の小野に負け、藤崎三段對初段早川、山中、中野、宮部、二段福田の五人掛けは福田と引分に了つた。

右終了後送別茶話會に移り、幹事盛田保三氏の送別の辭に對し、内田師範告別の辭を述べ。其説く所言々句々肺腑より出で、只管功を他に譲り、若し自分が多少なりとも柔道部の爲めに盡したる所ありとせば、そは今後に於て現はるるもの

なりとて、能く將來を戒められた。それより餘興あり、寒月皎々たる夜の靜寂を破つて、綱町原頭に萬歳を三唱して散會したるは、十時過ぎであつた。

(一) 盛大なる月次勝負

師範内田氏を朝鮮に送りたる後の柔道部は、如何に成り行くならんと思はれしが、初段二段三段さては一級二級の頭株が、自ら勵み、後進を導く熱心の結果、依然として盛況をつけ、月次勝負の如きも三日を費さざれば行ひ切れる程であつた。五月十八日午後二時より、紫組無級者の勝負あり、同二十一日午後三時より、三段五月女、二段吉武、同平賀、初段小泉諸氏審判の下に、成年無級者の勝負行はれ、更にその翌二十二日午後三時より有級有段者勝負が開かれた。茲に是の最後の勝負の模様を掲ぐることとする。

有級有段者月次勝負の掲示に誘はれて、集まる觀客は道場に満ち、襟帶黒帯の勇士無慮百名。幕は鈴木、金子の紅顔子によつて開かれ、平賀二段及び總大將藤崎三段の試合によりて閉ぢられた。

(一)	○○	{ 鈴木 鐵太郎	(四)	○	{ 島崎 靜之	(七)	×	{ 古川 基一	(一〇)	○	{ 橫溝 儀八
(二)	○○	{ 鈴木 鐵太郎	(五)	×	{ 三代川 陸質郎	(八)	○○	{ 中村 壮吉	(一一)	○○	{ 柳井 松祐
(三)	×	{ 鈴木 鐵太郎	(六)	○	{ 古川 基一	(九)	○	{ 守谷 正毅	(一二)	○○	{ 柳井 松祐
三代川	陸質郎										{ 南保一
											{ 柳井 松祐
											{ 情野 金三

『(二) 段が鼻の先にぶらつける鈴木鐵太郎、之に向ふは學級中才學拔群の稱ある金子壽雄。平素の熱心は其功空しからず、大外刈と捲込は見事に極まつて、鈴木の勝となれり。(二)次いで出でたるは、新に幕に入りたる島崎靜之なるが、三分經つ迄に、鈴木の體落一本に胄を脱ぎしは是非もなし。(三)三代川陸質郎中々馬力の勇將なれば、鈴木も餘程疲れと見へ、遂に引分。(四)茲に兩敗將、金子、島崎の仕合ありしが、大外刈にて島崎の勝。(五)元にかへつて三代川に撃て掛けりしは古川甚一、施すべき業もなかりしか、引分となりて、(六)殘れる古川は出て來る石井俊三を腰投にて倒し、(七)續いて向ふ中村壯吉と戰ふこと六分三十秒、遂に分けとなる。(八)中村は守谷正毅を、大外刈返と襟絞にて破り、(九)細心なる横溝儀八は左の釣込腰を以て能く中村を倒したり。(一〇)次に立ちしは柔道に其名も高き二毛男の一人『お爺』を以て通れる柳井松祐、一見三段の相あり。大腰を以て横溝を征し、(一一)大腰と十字固を以て南保一を屠り、(一二)内股にて情野金三の刃にかかる。(一三)間に横溝と南の仕合あり。背負の合業を以て横溝の勝。次は(一四)近來の取手古川興孝と石井央雄、巴投と背負投にて前者の勝。(一五)近頃ボートに熱中する樺村隆現はる、六分四十秒の後引分。(一六)花和尚の渡邊茂は能く樺村を破りしも、(一七)次に現れし三級に於て今旭將軍と歌はるゝ、作川信二郎に何條以て敵し得んや、作川の足拂と巴投は見事に功を奏す、時を経る僅に二十秒。(一八)茲に河西葦平代つて出づ。河西は經歴と云ひ、平素の練習と云ひ、又其業と云ひ、一方の旗頭たるの資格を具ふる者、觀客は片唾を呑み、戰漸く壯快となる。力と力、技と技、相戦ふると七分十秒。既に引分の宣告あらんとする一刹那、作川の跳腰相手を飛ばす。河西は右の腕を痛め居りし爲めか、有効なる背負投の見るべきなかりしは、飽迄も遺憾なりき。(一九)次に現はれしは古武士谷岡謙、此日の働き振りは、谷岡が入部以來初めての壯觀にて、非常に氣強く思はしめたり。谷岡大外刈に出で、作川腰投にて報いしが、戰ふ事七分、谷岡に油斷ありと見てとるや、作川足拂を試みて之を倒したり。(二〇)次に渡邊と河西の仕合ありしも引分となり、(二一)更に作川に向つて立ちしは、小五月女の稱ある堺泰吉なるが、巴投にて破らる。一時有力なりし堺が、斯くも

後進の爲めに不覺を取りしは、全く平素稽古の不足に原因せるものと見しは僻目か。次に（二二）河西と谷岡の顔合せありしが、二分三秒にて河西の背負論に當る。（二三）河西に向て挑みしは堺なりしが、又も足拂にて果敢なき最後を遂げたり。（二四）作川再び立ち、之に向ふは無暗に熱心なる岩下勘七郎、兩者相對せば恰も父と子の觀あり。作川は容赦なく跳腰にてとりぬ。岩下頻りに巴を試むるも、作川泰山の如くなりしが、岩下負傷する所ありて一本勝負。（二五）續いて出でしは秋山修一、作川に跳腰にて一本取られ、其時間は二分、宛然投げられる爲に出て來たかの觀ありき。（二六）次に出でしは白鷺天狗とて、殊に小供仲間に知られたる土屋の安。幼年より叩き上げたる特長としては、ねばつこき事なり、業も仲々切れる所あり、其蒟蒻然たる體を以て、大河の決するが如き作川を喰ひ止めたる亦偶然にあらず。而して其業は二本共左の體落。（二七）次なる秋山重次郎も亦大内刈と足拂にて敗らる。（二八）河西と岩下は、後者の負傷尙癒へざりしか、又も痛分。（二九）土屋復び出でしが白井善藏と引分。（三〇）河西葦平相手來れと身構へれば、秋山修一向ふて跳腰にて敗らる。（三一）白井に應じたるは西川龜吉、左釣込腰と體落にて奇麗に投飛ばし、（三二）古橋立ちしが西川傷つきて分け。（三三）西原久巴投と横車にて見事に古橋を投げ飛ばせしが、（三四）次の田村市郎に一分經つか經たぬ内に、左腰を二本迄喰はされたるは氣の毒。（三五）近來めつきり進歩したる二級石渡泰三郎、紫帶豊に立向ふ、何等の盛觀ぞ。戦は今や花も實もある佳境に進めり。石渡跳腰を試みしも極らさりしが、左體落を以て遂に勝つ。（三六）小野秀一出づ。短身肥満腕力抜群にして、口善惡なき京童は彼を以て智慧の塊りと呼ぶ、慄巧なること文殊の如く、するきこと狐の如ければなり。石渡跳腰にて分を取りしが、遂に智慧の塊りの爲め、四方固に押へられたり。（三七）二年前の中島重次郎と云へば、飛鳥をも落さんとする勢ありしが、何故か近頃其勢少しく鈍りたり。當日の戦に於て七分間彼は何物をも施す所なくして、遂に小野が後絞を喰ひたりき。次は（三八）綠髮蒼頰の近藤謙治、眞の柔道家を見よと云はねばかりの面構。剛道家小野の秀一、鮮かに左の釣込腰にて難ぎ倒されたり。（三九）上杉彌一郎出でゝ、無愛想に十字固めを一本とる。（四〇）次に現はれ

しは老猾なる一級森本利三郎、奇麗なる跳腰と、上杉より仕掛けられたる大まかなる跳腰をば残して、左の體落に變りたる其機敏、稱賛の辭を知らず。(四二)戦は局面を一轉して、有段者の出馬となる。幼年組より上りたる、新初段濱田隆一小内刈と跳腰に森本を投げつけて、黒帯の面目を保てば、次には(四二)奔馬の如き山中駿吉、お得意の左釣込腰、一本共効を奏して、是れ亦故參初段の面目を維持したりと謂ふべきか。(四三)馬力に於ては、優るとも劣るまじき中野榮三郎、山中がお得意も施すに術なく、巴より袈裟に移りて押込み、更に腕の逆にて遂に山中を倒せり。(四四)ここに飛び出したる快男兒は、黑龙江とて人呼んで大國民と稱す。其勝負に大膽なると巧者なる技術とは、相俟つて短小なる體軀に花を咲かしむ。共に一筋繩では行かぬ代物、奮闘十八分に及ぶも遂に勝敗なし。(四五)入り替りたる山田又司、隅田川にて鍛へ上げたる馬力は、恰も中野と伯仲の間にある傑物なり、黑龙江の苦闘思ふべし。お得意の臥業も逆も、山田に對しては一向に効目なく、十二分の後、却て足拂に倒されたるぞ氣の毒なれ。(四六)二段福田龍現はれて山田に對す。山田大に奮ひしも、老練なる福田は常に難を未然に防ぎ、遂に後続にて二段の光を放てり。(四七)前の世からの仇敵の如く、三級頃より相並んで進みたる平賀恒次郎、童顔なるも筋骨逞しく、五尺六寸に餘る巨軀を運んで、悠々として福田に迫る。好敵手を得て福田も亦能く之に應戦し、元氣と殺氣に満ちたる仕合は、引分迄十五分に亘る間、能く觀客を飽かしむことなく、以て如何に好勝負なりしかを知り得べし。(四八)總大將三段藤崎達磨愈々こゝに出陣す。福田を持て餘したる平賀は、我任務は既に了れりと云ふ體なりしが、足拂と後絞にて果敢なき最後を遂げられたり、此の間五分。これにて終了。時に午後七時七分。』

(三) 飯塚先生の師範就任

前師範内田先生は、渡韓の爲め辭任せられて以來、我が柔道部は師範を戴かざること三箇月なりしに、當時大望を懷い

て、西比利亞、滿洲に飛躍すべく、徐ろに籌策を運らしてゐた五段飯塚國三郎先生、恰も上京中なりしを幸ひ、是非共先生を招じて吾等の師範に仰がんと、部員諸氏の熱心なる努力懇請の結果、漸く先生の承諾を得て、五月末よりその勇姿を道場に見るに至つたことは、我が柔道部に取りて無上の光榮であつた。大望を抱ける先生が、それを犠牲にして、先づ我が部の爲に力を致さんとし、子弟の教育に身を投ぜられたるは、寔に武士の情とや云ふべき。

塾と先生との關係を尋ねるに、先生もその昔は、三田山上童子寮の寄宿生であつた。随つて塾生としても我等の先輩である。内田先生といひ、飯塚先生といひ、塾と淺からざる因縁に繋がれてゐるのは、目出度も亦不思議な縁と謂はなければならない。

先生が塾に入學したのは、柔道部成立前の時代であつて、明治二十二年の秋であつた。當時我が塾に於ては、講道館一段であつた塾生小南英策氏が主となつて、幼稚舎の道場に於て他の塾生に柔道を教へてゐた時代であつて、先生も亦その仲間に入つて稽古を積んだのである。小兵なれども腕力優れ、銳氣事に屈せざる青年飯塚氏は、忽ちにして技術の進歩を現はしたのであるが、一年ばかりの後海軍兵學校豫備校に轉じ、爾後講道館に於て更に大いに其技を研ぎ、二十六年に初段に列せられた。それより専ら柔道生活に入り、先生の懷舊談にあるが如く、諸校の教師となりて各地に轉任し、最も長く留まつたのは福岡であつた。七ヶ年の福岡在任中、福岡を中心として其附近に、講道館柔道を完全に普及せしめたのは實に先生であつた。明治三十七年日露戰爭の勃發すると共に、急遽滿洲に渡りて戰線上に活躍し、偶々沙河の對陣中我が軍部の主催の下に日、鮮、支三國の武道競技會開かるゝに遭遇し、血河屍山の間に養はれた鬱勃たる蠻勇一時に爆發して、異境に柔道の神技を示し、東洋の強は我れこそと出で來れる鮮、支兩國の選手の心膽を寒からしめ、戰はずして遂に彼等を屈服し、日本人の爲めに萬丈の氣を吐いたこともあつた。

先生は身長僅に五尺一寸、體重之に準じて十五貫五百に過ぎざるも、今日では八段に進み、柔道界の本山たる講道館の

總帥格に列してゐる。體小なりと雖も筋肉隆々として嚴の如く、身軽しと雖もその腕能く大鼎を揚ぐ、精力の絶倫なること、有段者を片端から稽古して倦む所なしといふ有様である。明治四十四年には身長五尺八寸にして體重十九貫を有する當時の清水二段を片腕にてさし上げ、道場を三周して舌を捲かしめたことがあつた。其立業の神速にして電光石火的なる快味、臥業の銳悍にして鬼をもひしがんとする強味、多く比儕を見ざる所である。身心兩面の力相合して一丸となれる先生の短軀の上に、柔道は一層の光輝を放つてゐると謂ふべきである。

先生は師範として我が部に臨まるゝこと最も長く、昨年（昭和六年）を以つて勤続二十五周年の祝賀會が開かれたのを以つても知られる。平生吾人は先生に對して報いる所少なきも、先生は其熱心と俠氣とを以つて、能く我が柔道部の大家庭を維持し、和氣靄然たる中に部員の勵精を見るは、一に先生の人格の賜ものであると深く感謝に堪へざる所である。

（四）予の柔道生活

飯塚國三郎

柔道に捧げた一生、それは坊主になつた氣持ちである。

明治八年、栃木縣下都賀郡三鴨村に生れ、高等小學を卒へてから十五の春、東京に出て慶應義塾に入つた。郷里では毎日一里半の道を小學校に通つた外、家に歸つてからは薪取りもやれば草刈りもやつてゐた。さういふ風に働いた身體であるから、塾に來ても體操位では運動にならぬ。その頃塾の學生に講道館の門人がゐて、柔道俱樂部なるものが出来てゐた。私は早速それに入會して始めて柔道の手ほどきを受けたのである。塾には一年ばかりより居らなかつた。

明治二十四年、十七の頃磯貝、永岡氏などの連中と相前後して講道館に入門した。當時麹町の番町に在つた講道館の道

場は、三十疊餘りの堀立て小屋に過ぎなかつた。門人も僅に七、八十名程で、横山、山下などが稽古をつけてゐて、財部元海相や旅順港の勇士廣瀬中佐などは極めて熱心で、たまに若槻禮次郎男が顔を見せてゐた時代であつた。二十六年に初段を受けられた。當時は他流試合が盛で、初段にもなると、他流の大家と試合をしたものである。

二段になつてから、鈴木鐵藏氏の後を繼いで一中の教師となり、三段のころ横山氏の助手となつて高師で教へた。明治三十年の講道館鏡開きの時であつたらう、講道館切つての強力で二十五貫の大男肝付宗次氏をば、左の背負と釣込腰で、立つてゐるひまのない程續けざまに投げつけた。それを嘉納先生と一緒に鹿児島の造士館長岩崎氏が見てゐたが、非常に懇望されたので、止むなく鹿児島の造士館に赴任したのが、地方廻りの始まり、一年ばかりしてから東京に歸り、こんどは北の仙臺の二高に赴任した。二高にある時、横山、永岡兩氏に率ゐられてゐた一高と勝負をやつて、之を破つた。これが日本に於ける對校試合の嚆矢である。

二高を辭して東京に歸つてから、内田良平氏に勧誘されて福岡に行き、或は町道場を開き、或は師範や中學等の諸校に出教授をなし、或は軍隊にも教へに行つたりして、在留七ヶ年の間に、福岡を中心として其附近一帯に、講道館柔道を大いに扶植した。福岡は一般武道の盛な所で、柔道も各流派が對立して居り、それが亦政治的運動などの場合にも互に張り合つてゐて、其熱のあること他國の比ではなかつた。福岡の柔道は、自剛天眞流と双水執流と講道館流との合流したものであつた。

さうしてゐる間に、日露の風雲急を告げて、遂に我が國も満洲に出兵するやうになり、私も或種の使命を帶びて、急遽満洲に行つたのである。戰線でも矢張り柔道に就て面白い話がある。

或時のこと、日露兩軍が沙河で對陣中であつたが、私が其地方を廻つて軍政署に行つて見ると、丁度軍隊の慰安と士氣を鼓舞する爲に、同署内に日鮮支三國の武術家を集めて、競技會を催さうといふ所であつた。日本側では、各守備隊から

腕節の強い連中をすぐつて出場させ、支那側からは、楊といふ身の丈五尺八九寸、二十三貫もあらうといふ大兵を拳法の選手として送り出し、朝鮮側からも力自慢の力士がやつて來た。そんなことがあらうとは露知らず、私は偶然其處へ出會はしたのだが、軍政長官福島將軍の部下である軍政官小原中佐が私を見て、「好い所へやつて來て呉れた。實は今三國の武術競技大會を開く所であるから、是非出て呉れ」といふので、遂に掲まへられて了つた。即ち私は支那の拳法選手楊と試合するやうに仕組まれたのであつた。

當日競技場へ行つて見ると、觀衆場に満ち、今日の月桂冠は何人の手に落ちるかと、片唾を呑んで待つてゐるといふ有様。日本軍の選手はと見れば、講道館の二段三段といふ豪の者も加はつてゐた。皆満洲の野に櫛風沐雨の辛苦を重ね、千軍萬馬の間を往來して來た勇士であつて、顎骨秀でて鬚髯蓬々、その間から眼ばかり光らしてゐるといふやうな髭武者であつた。

支那側の要求に依つて、先づ柔道の如何なるものかを示すことになつた。柔道衣などありはしない。朝鮮服に日本袴といふ異様な打扮で出場し、最初に投の形をやつて見せた。次に楊も亦支那の拳法の形を演じた。それから又私は幾多の戦場を馳騁して來た荒武者共十數名を相手にして、柔道の試合をやつた。その中には講道館の二段三段もゐた。力を入れると朝鮮服が裂けるといふ不便はあつたが、此等の荒武者を悉く手玉に取つて見せた。サアさうなると支那人などは弱い者で、一方に於て日本軍の強大なことを知つてゐる彼等は、今眼のあたり此等軍隊選り抜きの勇士を、續けさまで薙ぎ倒して、柔道の勢を見ては、心膽を一時に寒からしめて、遂に戦ふ氣力さへ失つて了つた。こつちはまだ血氣盛り、加ふるに尾山を越え血河を涉り歩いて、殺伐たる元氣旺盛の時であつたから、その勢に乗じて、朝鮮の選手に對しても一人二人は面倒なり、皆束になつてやつて來いと呑んでやつたら、誰一人出て來る者もなかつた。斯くて戦はずして日本柔道の威勢を彼等の間に示したのであつた。

其時來觀してゐた支那の劉道臺の如きは、感歎の餘りに私の手を握り、肩をさすり、身體は小兵だが馬をもさし上げんばかりの強さがあると云ひ『日本兵の強い所以は、今日の前に君の神技を見てはつきり分つた。日本には君以上の人人が居るか』と尋ねられた故、私のやうな者はいくらも居ると答へてやつた。それからこのことを道臺から袁世凱に上申した結果、私を支那に招聘せんと内交渉があつたがお断りして、それから樺太探検に出掛けた。望へ招かれたのはそれからのことである。(談話筆記)

(五) 柔道談

飯塚國三郎

日本の柔術は、神代から發達した日本固有の武術である。垂仁天皇の御代に野見宿禰なる者、當麻蹶速と試合して之に勝つたと云ふ史實がある。之は普通に相撲の起源となつて居るが、試合の形式や實際の勝負の模様を技術的に觀察すると寧ろ柔術であつたやうに思はれる。

後代政權が武門に移り、四方に豪族が起つて互に干戈を交へた際には、恰も今日の商工業が分業的に發達したやうに、武藝も自然の要求から、各々専門的に研究工夫せられ、竹内流腰廻り捕手術などが生れ出て有名なものとなつた。時は天文から永祿年間。剣術の方でも同時代に上泉信綱が擡頭して流派の始祖と仰がるゝ人になつた。竹内二世久勝の如きは、後水尾天皇の御覽を賜はる光榮に浴したといふことである。當流紫色の迅繩を用ゐるに至つたのは、攝政近衛公より冠の紐を解き與へられたることから起つてゐる。この久勝の武勇傳は劍剛宮本武藏に比すべきものがあり、又此の人はなかなかの長壽であつて九十七歳で京都に歿した。其外、鎧組討術、體術、和術、やわら、などと云つて澤山の流派が興つた。

著名なるものは關口流、起倒流、眞揚流、拔心流、四天流、鎌卷流、直信流、無念流等である。

柔術といふ名稱の起つたのは、萬治寛文の頃であらう。萬治二年に明人陳元賛が我國に歸化した。元賛は多藝なる才人肌の人であつたらしい。文學や美術に通じ、尾州侯に愛された。名古屋にゲンビン焼があつたのは、此の人が造つた陶器である。所が、彼を以て柔術の始祖なりとする流派がある。元來元賛は武人ではない、文藝の人であつた。或者は彼に就て白打三手を教へられ、之を工夫して柔術を組立てたとも云はれ、又或者は拳法を傳へられ、之を基礎として柔術を工夫したとも云はれて、一二の流派があるのであるが、當時支那に於ては拳法、白打の武藝あり、書物などにも書かれてあつたから、元賛が之を示して参考に供した位に過ぎなかつたのではなからうか。而して寛文十一年に元賛は死んでゐるから柔術の名の起つたのは、萬治寛文の頃であらうと思ふ。然し柔術といふ名稱だけは、支那の古本に見えてゐるから、元賛の發明語ではない。それから次第に竹内流の腰廻り捕手術も、體術も、組討術も、和術も、柔術の名によつて代表せらるるやうになつたが、技術は全く日本流であつて、支那からの傳來ではない。例へば起倒流の如き、明人に就き拳法を傳へられ、柔術を組織し、世に傳へたものなりと云へない。允許狀には日本傳起倒流柔術云々と書かれてゐた。この柔術の名稱に依て、柔克制剛といふやうな、やわらかな味とも申すべき所が、簡単明瞭に現はされてゐる。尙柔術に當身、殺法と云ふ秘術としたものがある。或は之が拳法、白打の支那武術の一つかと考へられぬこともない。又活法や、打身、接骨は、漢法醫學の一部であつたかも知れない。少しはその影響があつたらう。傳書などを觀ると、唐人の衣裳を着た人物が畫かれでゐる。が、本朝に於ても、此等の術は既に發達して居たに相違ないのである。彼の南蠻鐵などといふと、當時の人心に強く響くものだから、大和銀冶や、備前もの、或は相州銀への名刀も、その優れたるかね、にほひ、切れあち等をよそに、南蠻鐵への大業のなぞと廣告して賣り出されたものである。これが恰も明治維新後、舶來品でなければ自慢にならないのと同じに、唐宋以來の文藝を崇拜して居つた總ての影響と思ふ。

徳川時代には、剛健の氣風が次第に廢頽して來た。日光東照宮の建築を觀ると、それが明かに判る。如何にも立派で龍宮城の夢をまのあたりに見るやうだ。戰場往來の武士の子孫が、斯かる美術的建築をするやうになつたのである。從つて文物制度は整理せられ、文明は躍進したかも知れない。武術の如きも藝術的には進歩したらう。だが床の間の飾り物に成つた感がある。鎖國日本の太平は遂に文弱の弊に陥り、嘗ては千軍萬馬、四百餘州を蹂躪せんとした太閤の氣魄は消滅して、當時勇武第一の關東武者は、今日一部の墮落學生が、カフェー・ダンス・ホールに出入し、粒々辛苦の親の汗水とも云ふべき金錢を湯水の如く遣ふやうに、祖先が戰場槍先の功名で贏ち得た財寶をつかみ出して、今日は湯島の花、明日は吉原の月と遊興に耽つて居つたから、幕府の權威衰亡し、櫻田門外に大老の首は飛び、浦賀に黒烟濛々、開國を迫るといふ時代の現はれたのは想像に餘りある。

明治になつて、武藝は西洋の砲術の爲に悉く打ち破られてしまつた。獨り武藝と云はず立派な國粹迄も、見る影もなく捨てられ、顧みられぬやうになつた。が、日本はどこまでも神國日本だと思ふ。一時の盛衰はあるにしても、盤根錯節に遭ふ毎に、所謂日本道は生々として更に力を加へ来るのである。見よ、西洋の文物を一通り取り入れたところで、大清國と戰つて東洋の霸權を握つたではないか、次で臥薪嘗膽十年後には、世界の英傑ナボレオンすら遠征中大敗を喫した露國の暴威を滿洲の野に破り、又海にはバルチック大艦隊を擊滅して、世界の戰史上に赫々たる武名を擧げたではないか。

由來日本は外國崇拜であつたが、漸く國粹に眼醒めて來た。武士道の日本、正義の國として、世界に認めらるゝやうになつた。殊に歐洲大戰後は、五大強國の地位より進んで、更に現在では英、米と共に三大海軍國の一つとして世界を睥睨してゐる。

柔術の日本といふ、日本の國威が振ふと同時に柔術が歐米人に驚かれて來た。夫は一口に言へば、矮小な日本人が外國の大男を投げ飛ばすからである。柔術では、理論的に有効な動作をすれば、力や形の大小は問題ではないのである。勝負

上勝を制する技術が組立てられてゐる。之を練習すれば、大男にでも力持ちにでも勝てるのである。敵が追撃して来れば適當にその鋒先をかわし、虚なる處を突き當てる。又敵が躊躇して進まざる時は、勢ひ鋭く突込み、而して敵之に應戦して來れば、即ち其機を捉へて投げ倒す。かくの如く瞬間の虚實を左右する怪腕妙技が、練習の結果體得せらるゝのである。歐米人は、砲術や機械に堪能であるかも知れない。この點一步の長があるやうである。併し日本人は、其威力や利用の大なる事を知るときは、物にこだわらずして能く之を研究し、自家樂籠中のものとする。而して之を善用する所に、大和魂の聰明さがあるのである。

柔術が柔道と云はるゝやうになつたのは、いつ頃からであるかと云ふに、明治十五年講道館が柔術を以て體育、修身、勝負の理合、之を言ひ代へれば、體育、德育、智育といふ教育の三眼目を標榜して、道場を開館した時から始まる。勿論柔道といふ語は新語ではない。以前から柔術、やわらなどと同様、少しは云はれたものであるが、代名詞的地位を得たのは、全く講道館柔道を以て始つたのである。劍道の如きも最近まで擊劍であつた。武徳會が明治二十九年に設立せられ、時勢の進運に促されて盛大になつたが、長い間劍術と稱せられてゐた。所が柔道の名の意味深長なるを認めて、擊劍の方も剣道といふやうになつた。

元來柔道は武術であるが、體育、修身、勝負の理合を説くやうになつた爲め、教育界に重きを爲すやうになつた。學生の修行者が、健康な身體に鍛へられて學校を卒業する。從て國民的健全な思想を以て居る。之が政治家となり、實業家となり、或は軍部に、教育に、各々職務に從事して、勤勉であり、能率を擧げるから信用せられる。而して以心傳心に武道の徳風が人を感化して、青年學生の上に武道熱が高まり、劍道の如きも復古した以上に盛になつた。

所へ昭和の天覽試合が行はれた。動もすれば運動競技と同一に扱はれる傾向であつた武道は、日本の歴史的のものであつて、精神教育上重大なる關係があるのである。單に運動競技として見れば、舶來ものゝ方が一步の長があるかも知れな

い。國際的競技などと云へば、青年の胸は高鳴る。新聞紙之を書き、ファンは喝采する、人氣がその方に向く。然しながら、剣道の如き、柔道の如きは、武士道の粹とも云ふ可き鍛練であつて、之に依る精神上の影響は大なるものである。國民生活上何が大事であるかと云へば、祖國愛である。盡忠報國は武士道の根本義である。此の正義こそ、吾々の修養の眼目である。

現在中學校では、東京も地方も府立縣立皆正科として柔劍道の課目を設けてゐる。實業學校の中には、準正科の處もあるやうである。唯私立の學校だけは一樣でないが、大抵公立に準じて之を教へてゐる。専門學校や大學に於ては、夙に道場が設置せられて、體育の爲めの、又精神修養の爲めの利用に供してゐる。而して稽古や試合を樂しみ、亦苦しむ間に、日本精神を養ひ、國家の干城たる自覺が起るやうになる。柔道の正義なるものは、技術の一般を通じて正しき者が勝つといふ所にある。即ち和と順によりて力が結晶せられた者が、技の勝れた者である。而して之が心理的に至大至剛の氣分を造りあげて、心身の健全なる發達を促すのである。(談話筆記)

(六) 飯塚先生歡迎紅白勝負

六月十一日午後二時、新師範飯塚先生及び偶々朝鮮より歸京中であつた前師範内田先生を招待して歡迎會を開き、左の如き紅白勝負を行つた。

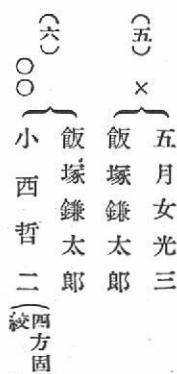
紅軍
白軍

 同 製 固 伊 庭 謙 造	松 村 松 之 助  湯 村 藤 助 (巻込)
 平 松 茂 治  清 水 邦 雄 (右腰)  橫 掛	 伊豫田 三 郎  島崎 靜 之



(七) 秋季月次勝負

十一月二十四舉行



(七) ○○ 小 西 哲 二 (大腰)
 ○ 平 松 茂 治 (卷込)
 (八) ○○ 小 西 哲 二
 ○ 鈴 木 鐵 太 郎 (大外刈)
 (九) ○ 鈴 木 鐵 太 郎 (?)

(五) ○○ 古 川 甚 一 (小外刈)
 ○ 古 川 甚 一 (鈎込足)
 (六) ○○ 古 川 甚 一 (大外刈)
 ○ 千 葉 强 三
 (七) ○○ 古 川 甚 一
 ○ 古 川 甚 一 (鈎込足)

(一〇) × 橫 溝 儀 八
 鈴 木 鐵 太 郎
 (一〇) × 橫 溝 儀 八
 柳 井 松 祐 (足落)
 (一一) ○○ 柳 井 松 祐 (體落)
 南 保 一
 (一二) ○○ 柳 井 松 祐 (足拂)
 佐 久 間
 (一三) ○○ 柳 井 松 祐 (背負投)
 佐 久 間
 (一四) ○○ 柳 井 松 祐 (足拂固)
 石 井 央 雄

(一九) ○○ 櫻 村 隆
 櫻 村 隆 (大腰)
 (一〇) ○○ 河 西 葦 平 (背負投)
 秋 山 重 次 郎
 (一一) ○○ 河 西 葦 平 (背負投)
 永 瀧 松 之 輔

(二七) ○○ 田 村 市 郎 (大腰)
 田 村 市 郎 (同)
 (二八) ○○ 潑 良 是 助 (大腰)
 石 渡 泰 三 郎 (綾内刈)

(二三) ○○ 白 井 善 藏 (足拂)
 古 橋 盛 男 (足拂)
 (二十四) ○○ 古 橋 盛 男 (同)
 小 原 善 次 郎 (背負投)
 (二四) ○○ 古 橋 盛 男 (鈎込足)
 古 橋 盛 男 (同)

右了つて平賀恒次郎氏に對する鈴木、古川、谷岡、瀬良、及び石渡氏の五人掛あり。平賀は十字固或は上四方等を以て四人まで抜きしが、最後の石渡に綾を以て敗れた。

(八) 第十五回柔道大會

今回の大會は十二月二日午前中、紫組十一組の三本勝負と、兩軍各十六名に分れたる紅白勝負と、四級七組の三本勝負とあり。午後は、來賓對部員の三本勝負と、更に紅白勝負とあり、頗る盛會であつた。今左に當日の催し中、午後の分丈けを記して置く。

(青) は青山師範、(日) は日蓮宗大學、(輪) は高輪中學、(附) は附屬中學、(臺) は臺灣協會、(外) は外國語學校(時) は時習舍、(體) は體育會、(萩) は萩原道場、其他前例に據る。

三 本 勝 負

(一) (講)	山 下 均	(五) ○(輪)	天漏田範一(足拂)	(九) ○(日)	高橋宣潮(裸絞)
○○	水 島 左 造(巴投)	○○(商)	五月女光三	○	石井央雄(十字固)
(井)	大 塚 伊 吉	(附) ×	田 代 信 德	(臺)	鈴木美也雄
○	松 村 松 之 助(跳卷)	(六)	中 村 慎 三 郎	○○(獨)	清 水 邦 雄(左腰)
○(青)	橋 本 熊 太 郎(背負投)	(七)	柳 井 松 祐	(一) ○	米 林 耕 作(左大腰)
(福)	澤 駒 吉		足拂返	(二)	佐 久 間 謙
(四) (日)	田 中 海 珠			(外) ×	杉 浦 齊
○(輪)	安 藤 年 元				鈴木鐵太郎

一〇 明治三十九年史

一六六

(一三) ○(外) 杉秀雄(大外刈)
○○ 千葉強三(送足拂)

(一一) ○(附) 平山成一郎(拂腰)
○○ 西原久

(三一) ○(美) 長野靖彦
○(講) 中村壯吉

(一四) ○(時) 田島義士
○○ 渡邊茂(裸綾左鉤込腰)

(二三) X 島西本節民
○○ 島泰次郎

(三二) X 藤本乘勝
○○ 中村壯吉

(一五) X ○(體) 市岡倍(前十字綾)
○○ 伊豫田三郎(大内刈)

(三四) X 坂梨繁藏
○○ 白井善藏

(三三) ○(商) 香澤源一郎
○○ 土屋安(跳腰)

(一六) ○(附) 千葉義衛
○○ 末廣雄一(左腰)

(二五) X 木原多賀次郎
○○ 朝倉萬盛

(三四) ○(時) 上野正雄
○○ 岩下勘七郎(絞)

(一七) X ○(外) 福澤三八
○○ 守屋節

(二六) ○(商) 佐々木哲亮(鉤込腰)
○○(附) 鳥井武雄

(三四) ○(附) 富永安次郎
○○(獨) 石井俊三(大外刈)

(一八) ○(井) 早川小三郎
○○ 谷村治吉(跳卷)

(二七) ○(附) 富永安次郎
○○(獨) 丹羽貫三(跳腰)

(三五) ○(講) 田中漸
○○ 永瀧松之輔

(一九) ○(附) 室田清三郎(同外刈)
○○(附) 金子誠三

(二八) ○(附) 富永安次郎
○○(獨) 丹羽貫三(跳腰)

(三六) ○(講) 田中漸
○○ 永瀧松之輔

(二〇) X ○(附) 松見守文
○○(附) 茂木三千藏

(二九) ○(講) 田中漸
○○(獨) 永瀧松之輔

(三七) X ○(附) 柴田一能
○○(獨) 平野勝次郎

(二一) ○(時) 毛利直良
○○ 三代川陸質郎(小内刈)

(三〇) ○(萩) 松井捨次郎(巴投)
○○ 秋山重次郎

番外(塾員)

(紫組柔之形あり)

紅白勝負

紅組

(臺)三森吉長

(外)小澤善兵衛

(商)武口守三

(早)梶川徳次郎

(講)丹波精三

(高)山崎直

(講)藤田松太郎

(體)柳田丈一

内田氏勝負之形

二段 藤吉
三段 吉
武 崎 達 磨

(高)山崎直

有段者三本勝負

(大)木安一

(森)本利三郎

右内股

(大)惠利田京治

利

武治

利

吉

雄

磨

(大)吉田保野

保

野

跳腰返

白組

小原善次郎

(商)田中

(講)西林

(高)大浦壽清

(早)上遠野

(講)岡謙

(小)瀬良是助

(藤)小笠原六郎左衛門

(講)藤田松太郎

(柳)柳田丈一

(高)山崎直

(講)藤田松太郎

(高)山崎直

利

京

治

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

(八)石川萬次

(商)田中

(講)西林

(高)大浦壽清

(早)上遠野

(講)岡謙

(小)瀬良是助

(藤)小笠原六郎左衛門

(講)藤田松太郎

(柳)柳田丈一

(高)山崎直

(講)藤田松太郎

(高)山崎直

(講)藤田松太郎

利

京

治

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

窪田松太郎

近藤謙治

索

中田忠治

石渡泰三郎

早川章次郎

山中駿吉

塚本太作

宮部修

又司

利

吉

雄

磨

利

吉

雄

磨

(四) ×	初段	石保	白山
○(早)	初段	濱田	初段
○○(大)	初段	吉富	山野
○○(大)	初段	嘉春	二段
○○(大)	初段	太郎	上
○○(大)	初段	宗井	岩
○○(大)	初段	亮	二
○○(大)	初段	同	村
○○(大)	初段	達	亘
○○(高)	初段	中	駿
○○(高)	初段	吉	右腰
○○(高)	初段	源	吉
○○(高)	初段	水	左腰
○○(高)	初段	村	駿
○○(高)	初段	芳	吉
○○(高)	初段	三郎	吉
○○(高)	初段	井	源
○○(高)	初段	永	水
○○(高)	初段	崎	村
○○(高)	初段	達	吉
○○(高)	初段	磨	駿

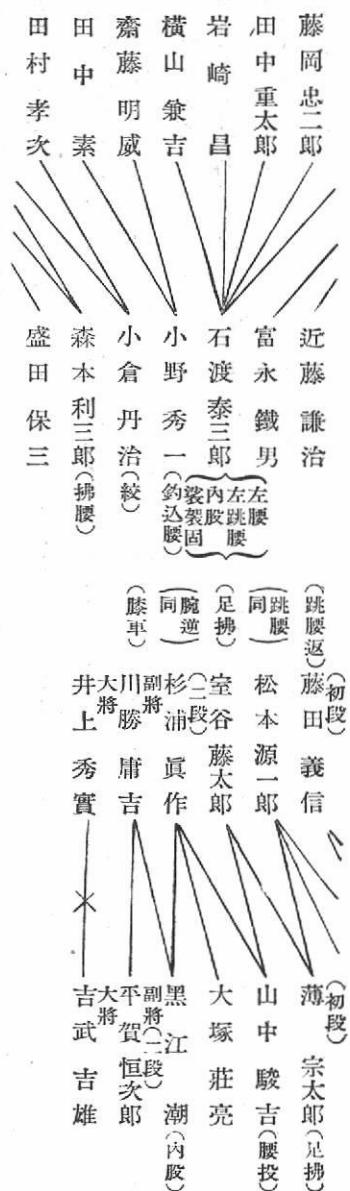
(九) 雜記

對東京高等商業學校練習試合

昨年第一高等學校との對校試合に於て敗戦したる高商は、如何にかして會稽の辱を雪がんものと、今年の練習は頗る猛烈を極め、三月一日我柔道部を稽古臺とし、技術を鍊磨せんとして、選手一同道場を訪れた。依つて我が部に於ては、相手相應の戰士を配列して、午後三時より練習試合を開始した。當時の對戦左の如し。

紅 (高商)
白 (塾)

(體落) 石塚 条藏	浅山 壽雄	(大外刈) 竹原 傳	秋山 重次郎
宗像 春城	鈴木 鐵太郎 (大外刈)	(大腰) 津守 豊治	林田 峰次
(?) 松村 松四郎	(?) 谷岡 謙	縣 賢	上杉 彌一郎



扁額「武勇」の由來

吉 武 吉 雄

綱町道場の正面に掲げられた『武勇』と書いた大額がある。此の額が日本の軍神東郷平八郎元帥の書である事を知らぬ人もある様だ。此の額を掲げるに到つた由來を茲に述べて置かう。

明治三十七八年頃、何人が依頼したか不明であるが、講道館の嘉納師範に書を依頼したと見へて、『道に従ふて勝を制するは武道の本道にして云々』の大額が出来たので、新築後の道場に掲げて置いた。所が塾の當局が之を見て、之は義塾の教育方針を悪様に攻撃して居り、塾とは主義を異にする嘉納の書であつて、面白くないから卸してしまへと命じて來た。然し吾々は、當時嘉納氏の人格を最も尊敬し、其教育方針にも共鳴して、柔道の道場に柔道の大家としての嘉納氏の武術に關する書を掲ぐるのであるから何等異とするに足らぬ。吾々は福澤先生の像でも掲げるやうな意味でやつて居るのでは

なく、丁度塾の圖書館にアダム・スミスの額を掲げて居る様に、アダム・スミスの全人格を尊重してではなく、經濟學を研究する義塾として、唯單に一個の經濟學者として之を掲げて居ると同じ意味であるから、一向差支へなしと抗議して下らなかつたが、餘り手厳しき催促があつたので、何時か卸された。然るに三十八年日露の大戰も終り、日本海軍の軍神と仰がれた東郷大將も凱旋せられ、非常な歡迎であつた。當時時事新報は、吾が海軍の事には非常に力を注いで居つて、大將の副官小笠原現中將と、福澤社長（義塾の體育會長）とは親交があつたので、福澤社長にお願して、大將に書いて頂く事にしたが、幸ひ快諾されたので、時事新報社を通じて一番大型の続を求めてお願した。其時滑稽な話がある。それは愈々続を持つて行く時、何時の間にか、湯本君が尺五位の続を一枚求めて、大型続の内にソツと入れて置いた。之れは將軍が軍人氣質で、「ヨシ來タ」と一氣に書いてくれるだらう、多分さうだらう、序だからどうせ筆を取りれば、一枚でも二枚でも同じさ、と獨合點で確に書いて貰へると思つて入れて置いた。其後時事新報から、出來たとの通知があつたので取りに行つたのが、今綱町に掲げてある武勇の大文字で、而も武勇の二文字は、続の右の方へ、馬鹿に片寄つた書き方をしてあつて、書家らしくなく、その武人然たる處が實に尊いとして、尙更一同喜んで、直に飯倉の坂上を左に入つて右側の經師屋に依頼して額としたが、經師屋は其続を形良く切つて、今の様に造り上げた。サア大變、切角武人然たる字配りの面白味が無くなつたのは、經師屋が不都合だと云ふので、實際真剣になつて、四拾圓計りの工賃を拾八圓位に値切つて來た事があつた。而して湯本君の続は、依然白地の儘返されて來て、獨合點は水泡に歸して大笑した。が然し湯本君なかなか商賣氣を出したものだつた。今でも時々思ひ出すと苦笑を禁じ得ない。

扁額『武勇』は、將軍が凱旋されて間もない、三十九年丙午の春まだ五十九歳の大元氣時代に書かれたもので、百年千年の後には、正に國寶ともなるべきものであるから、特記する事にした。

印度貴族の來場

昨年四月義塾を卒業したる前の幹事佐野甚之助氏は、印度よりの招聘に應じて同年九月渡印したる後、其國の政治及び社會制度の研究等々、豪族タゴール家の設立にかかる學塾に於て、同家の家族並に生徒四五十名に日本武士道の粹たる柔道と日本語とを教授してゐたが、此度同氏の門下生にしてタゴール家の御曹子と外一名北米に留學の途中、我が國に立寄りたる序を以つて在京の印度留学生二人を引伴れ、五月十日午後二時彼等師範の第二の故郷たる義塾を訪れ、直に道場に來臨したれば、幹事は種々に歓待し、投の形、勝負の形、亂取等を示した。尙其中の一人なる小タゴールに稽古を促したるに、喜んで柔道衣に着更へ、最初藤崎三段、次に吉武一段、黒江初段と稽古をなしたるなど、外國人としては珍らしくも健氣であつた。

尙隨行せる在京留學生の一人筋肉豊かなる大男は、角力術を以つて部員に試合を申込みたれば、黒江、福田交々立合ひ、二回共子供扱ひになしたるは滑稽であつた。されど素人にては到底敵ふべくも見えなかつた。それよりベースボールの練習を見せ、俱樂部樓上に案内して茶菓を出してもてなした。

部員送迎會

先に内田師範の送別會を催したる時は、本年度の卒業生部員三級杉浦壽作、及び小川立太郎兩氏に對する送別の意をも兼ねたものであつたが、其後初段田中信藏氏は卒業、同福田龍氏は米國に渡航、同中野榮三郎、三級遠口直次郎の兩氏は普通部を卒へて東京高等工業學校に入學、同高見澤廣作氏は獨逸に赴かることとなりたるに付、丁度米國より歸朝したる元の幹事小泉浩氏の歡迎と共に、五月二十三日此等舊部員諸君の爲めに送迎會を催し、例の如く部員の試合を行ひ、更に賑かなる餘興に一同歡を盡して散會した。

進級一括

○五月十八日進級したる人々左の如し

四級へ 朝山憲治、伊豫田三郎

○六月十一日進級したる人々

三級へ 千葉強三、清水邦雄、朝倉萬盛

二級へ 谷岡謙、土屋安、堺泰吉

○十一月十七日の昇進者

四級へ 岩田順一、峯岸鎮治、酒匂秀太郎、五月女光三、松岡恭平、湯村藤助、伊庭謙造、松村松之助、本山小彌太、

松尾恒四郎

三級へ 小原善次郎

一一 明治四十年史

(一) 卒業生送別紅白勝負

本年度卒業の部員諸氏の爲に、二月二十二、三日の二日間に亘りて、送別紅白勝負を行つたが、二十三日の取組は左の